

井上 順孝 編
伊藤 聰・遠藤 潤・森 瑞枝 著

『神道』日本生まれの宗教システム

新曜社刊行。四六版。二六九頁。二二〇〇円十税。

当書は宗教システムという概念の導入による整合性のある

神道史の通史と神道研究の新しい方向の模索を特徴としている。宗教システムという概念は、宗教史と社会史の構造的変化を関連付けて捉えようとする考え方で、宗教史では天理教や吉田神道という枠で宗教を捉えようとするが宗教システムという概念では近世神道や中世神道という枠で類似する基盤を持つ複数の教団を相関的に捉えようとするところに相違がある。

内容は序章「神道とは何か」のもとに「神道という宗教システム」を置き、宗教システムという概念はいかなるものかを説明する。そこで宗教システムという概念を紹介しておかねばならない。宗教システムという概念を構成する三要素である「主体」「回路」「情報」を簡単に解説すると次のようである。

「主体」すなわち宗教システムを構成する人々。うち教団を構成する人々を宗教メーカーと称し、信者と信者たり得る人々を宗教ユーザと称する。神道にあつては、宗教メーカーは神職や国学者などで宗教ユーザは氏子崇敬者およびそれになりうる人々であろう。

「回路」すなわち宗教システムの組織。うち物質的なものをハード面と称し精神的なものをソフト面と称する。神

道にあつてはハード面は神社と鎮守の森を始めとする国土の顕著な特徴を有する自然一切でソフト面は社格・一ノ宮・総社・二十二社そして式内社巡拝などであろう。「情報」とは宗教システムの輪郭となる教義と儀式と儀礼のことと、神道にあつては三大神勅・記紀に見る教義、祭式などにあたる。

いやすい情報体系に再編成したのである。なお補足すれば、編者は宗教システムという概念を用いることにより神道史をオブチマイズしたのである。したがつて当書は神道史の概説書としてだけでなく、宗教学の思考実験の書としての意義を有しているとも言えよう。